

## 村はずれの灯 ―芝居小屋周辺のひとびと

ドンドコ、ドンドコ、ドドンがドン……。

賑やかな太鼓の音が聞こえてくる。「長盛（ちょうせい）座」に芝居が掛かる。舞台衣装を身につけ、化粧した役者たちの後先を、今夜の演し物を染め抜いた色とりどりの幟（のぼり）が続く。担いでいるのは村の子どもたちだ。こうして村の端から端までついて歩くと、今夜の芝居の入場券がもらえる。わらじ履きの子どもたちの足取りは軽い。

先触れの一行が通りかかると、子どもはもちろん近所中の人たちが往来に集まってくる。その人だかりの中で、興行師はおもむろに立ちどまって、“口上”を述べた。

「……皆々様の賑々しき御来場を、心よりお待ち申し上げます」

大仰な身振り手振りで行われる出し物の紹介は何度聞いてもおもしろくて、子どもたちはその後をソロソロとついて歩いたものだという。

長盛座は町はずれの奥まった山際（大通五丁目、現法務局付近）にあった。大きな沼を埋め立てたところに建っていて、埋め残した沼には木の橋がかかっていた。小屋の木戸口にはムシロが下がり、観客席の土間にもムシロが敷いてあった。粗末な造りだったが、小屋は大きく、明治四十一年の大火の後には、焼けだされた人たちがここで生活したこともあったという。長盛座を始めたのは、キグレサーカスの軽業師 鉄割長五郎で、塚田正吉が父三之助から聞いたところによれば、この小屋を建てたのは光照寺初代住職の関 融禅だったという。明治のなかば頃のことと思われる。

長盛座の隣には元歌舞伎役者だったという石川三枝（さんし）が住みついていて、時折巡回してくる旅芸人の世話をしていた。奥 ちヨは、大正六年頃友だちの金田ソヨと二人で、ソヨの叔母が三枝といっしょに舞台稽古をしているのを見に行っていたことがある。またこの頃、小屋には香川某が管理人として住み込んでいたという。

長盛座の筋向いには遠藤初次郎が柩屋を営んでいたが、この男は尺八を吹きながら北海道へ渡ってきたというほどの芸人で、ただ見物しているだけではあきたらない。柩屋の弟子たちを使ってとうとう自分の小屋を建ててしまった。「えびす座」といった。明治四十一年のことである。こうして一時期国道を隔てて二軒の小屋が並ぶことになる。舞台の広い長盛座では芝居が掛かり、えびす座では流行（はやり）はじめの活動写真を見せた。

電気が引かれる前のことで、光源にカーバイトを使い、映写機は手まわしだった。羽織、袴の弁士は、みかん箱の内側に立てたローソクをたよりに、早くなったり遅くなったりする映像に合わせて台本を読む。無声映画の時代で、舞台裏では小豆を揺って波の音を出したり、雨を降らせたり……。悲しい場面になると弁士がバイオリンを弾いて気分を盛り上げた。まもなくえびす座は初次郎の樺太移住のために閉じられたが（明治四十五年）、ちょうどその頃長盛座は「浦栄（ほうえい）座」と改名している。

浦栄座には芝居や活動、浪花節が来たというが、山口政一は“石川五右衛門”を見に行っていたことがある。十のときだ。「いいかい、悪いことをするとこんなふうになるんだよ」と母親に諭されたことを覚えている。塚田正吉は、九本のしっぽを持った狐が七変化するという“金毛九尾の狐（先代萩）”

を見た。生まれて初めて見た舞台から目を離せずにいる正吉の隣では、金持ち連中がカントマメ（ピーナッツ）の皮を散らかしながら、やはりのんびりと舞台に見入っていた。「あの頃、カントマメというのは金持ちの食べ物だと思っていたよ」正吉の述懐である。

大正三、四年の木戸銭は二十五銭くらいだった。弟子に背負われて、来る芝居来る芝居片っ端から見に行ったという造船所の娘村山クラなどは別にして、一銭か二銭貰ってあめ玉を買うのが関の山だった当時の子どもにとって、二十五銭は贅沢な娯楽だった。塚田正吉は、活動が見たいとダダをこね、「そんな金持ちの真似ができるか！」と叱られて、泣きながら眠った記憶があるというし、中野誠士も、入場券欲しさに幟（のぼり）を担いだのを父親に見つけられ、「士族の息子が乞食の真似をして！」と、食事ぬきで家を追い出されたことがあったという。

石突似志男は、子どもの頃一時浦栄座に住んだことがある。小屋はひどく古くなっていて、ときどき野犬が入り込み観客席を走りまわったが、芝居はタダで見られた。兎雷也みみたいな格好をした歌舞伎役者が、花道を走ってきてパッと消え、観客の頭上を綱渡りで現われる。そのすばやさといったら……。あの芝居はすごかった。また芝居と活動を組み合わせた“連鎖劇”というのもあった。芝居の途中、たとえば滝から飛び下りるといようなシーンになると、サッと幕が下りて舞台が活動に変わる。そのタイミングが絶妙で、見ているとホントにドキドキしたものだという。

こうした人びとの憩いの場であった浦栄座も、大正五、六年になると建物の老朽化が進み、閉館を余儀なくされることになるのだが、その一方で、映画好き、芝居好きの人たちの手であらたに大黒座設立（大正七年）の準備が進められてゆくのである。

[文責 河村]

【話者】

奥  ちヨ	浦河町月寒	明治四十三年生まれ
越野 真成	浦河町大通四丁目	明治四十一年生まれ
本間 トシ	浦河町潮見町	明治三十七年生まれ
山口 政一	浦河町東栄	明治三十五年生まれ（平成三年十月没）
中野 誠士	浦河町大通五丁目	明治四十一年生まれ
塚田 正吉	浦河町大通二丁目	明治四十年生まれ

【参考】

札幌文庫四九	札幌の映画	平成元年	北海道新聞社
--------	-------	------	--------